

長野県更埴市

湯ノ崎遺跡・一本松古墳

—稻荷山公園建設に伴う発掘調査報告書—

1998

更埴市教育委員会



長野県更埴市

湯ノ崎遺跡・一本松古墳

—稻荷山公園建設に伴う発掘調査報告書—

1998

更埴市教育委員会

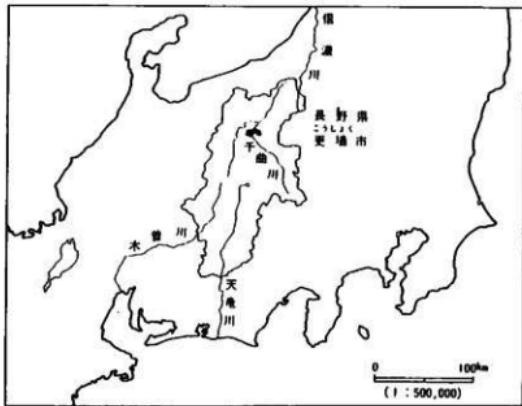
例 言

- 1 本書は、平成 8 年度から平成 9 年度にかけて実施した、稲荷山公園建設に伴う湯ノ崎遺跡及び一本松古墳発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集及び執筆は調査担当者が行った。
- 3 現場における実測図は担当者及び佐藤信之、国光一穂が作成し、遺物の実測は担当者が行った。
- 4 本文中の遺構、遺物実測図の縮尺は原則的に下記のとおりであるが、一部異なるものがある。

・遺構： 住居跡 1／60 横穴式石室 1／60 土坑 1／30
遺物： 土器 1／4 金属器 1／2 玉類 1／1

・遺物図版のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現した。

- 5 本書中の方位は、平面直角座標系第VII系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 6 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物については、湯ノ崎遺跡を略して平成 8 年度調査は「YNS」、平成 9 年度調査は「YNS 2」、一本松古墳は「1PM」と表記した。
- 7 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏よりご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。(敬称略 五十音順)
飯島哲也 風間栄一 土屋 橋 鶴田典昭 伝田伊史 烏羽英雄 富沢一明
藤沢高広 前島 卓 矢島洋子



目 次

例 言・目 次

第1章 調査の概要	
第1節 概要	1
第2節 発掘調査に至る経過	2
第2章 遺跡の環境	3
第3章 遺構と遺物	
第1節 湯ノ崎遺跡	
1 古墳	5
2 穫穴住居跡	17
3 土坑	19
第2節 一本松古墳	
1 古墳の概要	23
2 今回の調査	24
第4章 まとめ	25

写真図版

第1章 調査の概要

第1節 概 要

- 1 調査遺跡名 湯ノ崎遺跡（市台帳No.78）・一本松古墳（市台帳No.77）
- 2 所在地及び 地図
土地所有者 更埴市
- 3 原因及び 公共事業＝稲荷山公園建設に伴う発掘調査
事業委託者 更埴市（建設部都市計画課）
- 4 調査の内容 発掘調査約1,100m²
- 5 調査期間 発掘調査 平成8年11月11日～平成8年12月26日
平成9年7月2日～平成9年10月9日
整理調査 平成9年1月6日～平成10年3月27日
- 6 調査費用 6,154,834円（平成8年度2,186,007円、平成9年度3,968,827円）
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
担当者 小野紀男 更埴市教育委員会
調査参加者 岩崎廣雄 宇都宮義久 春日有子 金井順子 金田良一 国光一穂
小林昌子 小松よね 西沢拾太郎 松林深水 松本晃 宮崎恵子
宮崎米雄 宮本けさみ 柳沢悦子
- 事務局 下崎文義 教育長
矢島弘夫 教育次長 西巻功 文化課長 下崎雅信 文化財係長
矢島宏雄（平成8年度） 佐藤信之 小野紀男 宮島裕明（平成9年度）
- 委託等業者 重機 下崎建設㈱ 測量 緑光陽測量 緑公園緑地設計事務所
空撮 信州スカイテック㈱ 報告書印刷 信毎書籍印刷㈱
- 8 種別・時期 集落跡・古墳 古墳時代～中世
遺構・遺物 竪穴住居跡 2棟
古墳 4基
土坑 26基
溝跡 1基
ピット 2基
土器片・金属器・人骨 弥生時代～中世 コンテナ10箱

第2節 発掘調査に至る経過

平成7年7月、市建設部都市計画課より稻荷山において、公園建設を計画しているとの連絡があつた。市教育委員会では当該地には一本松古墳が所在し、また湯ノ崎遺跡では平成元年に行った試掘調査で遺構が確認されていることから、平成7年10月、県教育委員会を交えて保護協議を行った。その結果、事業計画が平成9年度からの予定であるため、当該年度に発掘調査を実施することになった。また一本松古墳については現状のまま保存することになった。

平成8年度に入り、市教育委員会では平成9年度に実施予定の発掘調査が、土ロバイパス建設に伴う発掘調査に加え、屋代中学校建設に伴う発掘調査など大規模な調査が計画されたため、湯ノ崎遺跡の発掘調査を平成8年度に繰り上げて実施するよう関係機関と協議を行った。その結果、平成8年11月から調査を行うこととなり、平成8年10月22日、57条の提出があった。市教育委員会では調査の準備を進め、11月11日より発掘調査を開始した。11月29日、発掘作業中に横穴式石室を持つ古墳を新たに発見したため、季節的な要因から調査を年度内に完了することが困難となったため、平成9年度にも調査を実施することとした。12月26日、埋め戻し及び土壌・シートによる遺構の養生を行い、調査を一時中断した。

平成9年7月2日より調査を再開し、10月9日調査を終了した。またこの間に、新たに発見した古墳についても、公園整備の中で保護、活用ができるよう都市計画課と協議を行った。

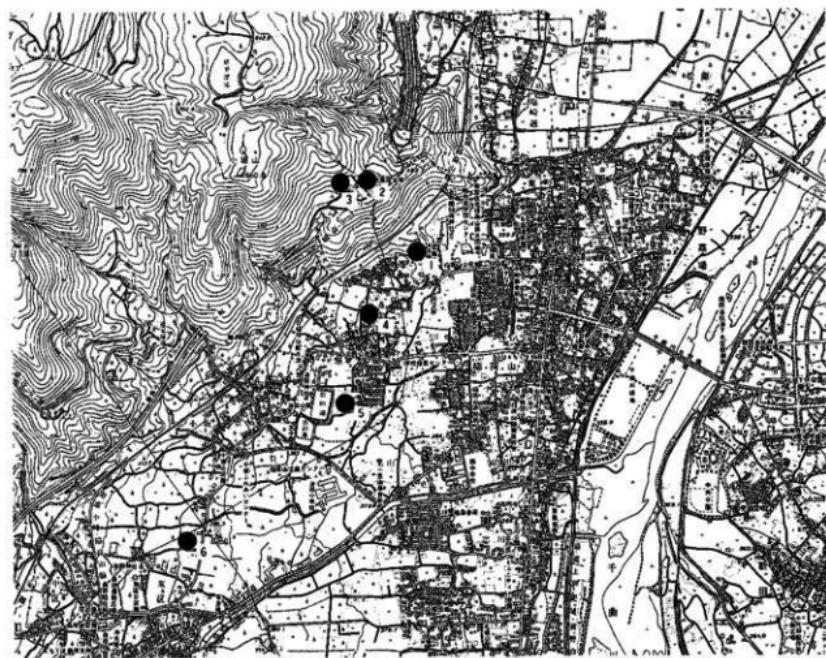
調査日誌

(平成8年度)	(平成9年度)
11月11日 重機による表土剥ぎ開始	7月2日 重機による表土剥ぎ開始
11月12日 作業員入り、検出作業開始	3号墳の土壌・シート撤去
11月13日 1号墳検出	7月3日 尾根上にトレンチ設定、中世土坑墓
11月25日 2号墳検出	検出
11月27日 重機により、調査区拡張	7月14日 3号墳石室内より中世人骨検出
11月29日 3号墳検出 基準点測量、一本松古墳地形測量実施	7月22日 3号墳人骨取り上げ、石室の掘り下げ開始
12月2日 本格的な降雪、積雪約20cm	8月6日 刀子、耳環などの副葬品出土 (連日、猛暑が続く)
12月9日 一本松古墳調査開始	8月13日～15日 お盆休み
12月16日 空撮実施	8月25日 石室排土のフリイかけ開始
12月19日 一本松古墳調査終了	9月8日 台風接近のため作業中止
12月20日 土壌・シートにより、3号墳の養生を行い、本日を持って現場における作業を終了する。	9月19日 作業員本日をもって終了
12月26日 調査終了部分の埋め戻しを行い 本年度の調査を終了する。	10月6日 空撮実施 10月7日 2号墳、3号墳の地形測量実施 10月9日 重機による埋め戻しを行い、現場における調査を完了する。

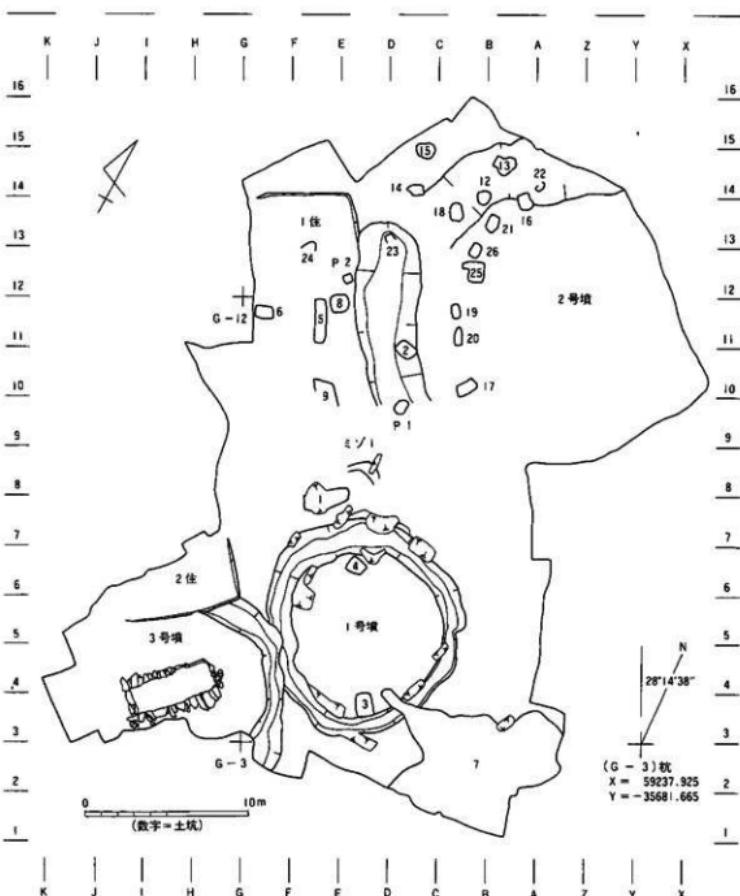
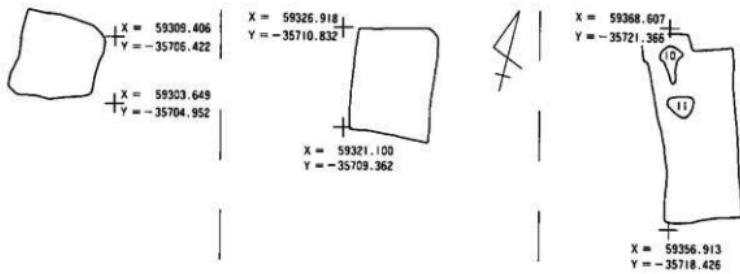
第2章 遺跡の環境

発掘調査地は、東経138度6分4秒・北緯36度32分0秒、海拔380m付近に位置し、長野県更城市大字稻荷山字湯ノ崎・篠山・大牧に所在する。遺跡は、千曲川が北西から北東に大きく流れを変える頂点部分の左岸に当たり、篠山から南東に延びる支尾根上に占地している。篠山山麓には、越将軍塚古墳、塚穴古墳などの古墳が築造され、尾根上にいくつかの古墳群を形成しているか開墾や盗掘などにより多くが破壊され、その実体は不明となっている。佐野川、蟹沢川、荏沢川等の中小河川によって開析された扇状地上には、元町遺跡、治田池遺跡、桑原遺跡群などの集落遺跡が所在している。治田池遺跡は住宅団地造成に伴い発掘調査が行われ、市内ではほとんど調査例のない縄文時代中期の遺構が検出され、また桑原遺跡群では老人保健施設建設に伴い発掘調査が行われ、弥生時代～平安時代に至る竪穴住居跡80棟などが検出されている。

湯ノ崎遺跡は、平成元年度に民間の開発計画によって試掘調査が行われ、古墳時代の住居跡が検出されている。また一本松古墳は大正時代に発見され、金環や八稜鏡が出土したとの記録が残されている。また、昭和59年度には更城市史編纂に伴い石室の清掃調査及び実測が行われている。



第1図 遺跡位置図



第2図 湯ノ崎遺跡全体図

第3章 遺構と遺物

第1節 湯ノ崎遺跡

調査は、平成元年に試掘調査を行い遺構が検出された周辺の平坦地を中心に行った。また尾根上の平坦地3か所にトレントを設定し、遺構の確認を行った。検出した遺構は古墳3基、竪穴住居跡2棟、土坑26基、溝1基、ピット2基に上る。このうち古墳は未周知の古墳であり、調査地が所在する尾根上には一本松古墳以外に複数の古墳が存在し、古墳群を形成していることが明らかとなった。しかしながら当該地は開墾による地形の変化が著しく、現地形からその存在を推定することは不可能であった。また調査地区内からは総数21基に上る中世の土坑墓が検出された。

1 古 墳

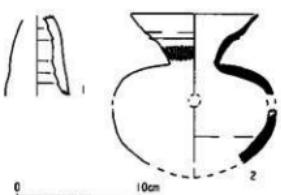
1号墳（第3、4図・図版1、6）

位 置：C-G-3~7区 規 模：長径10.2m 短径9.5m 平面形：円形

新旧関係：4号土坑を切り、3号墳、7号土坑に切られる。

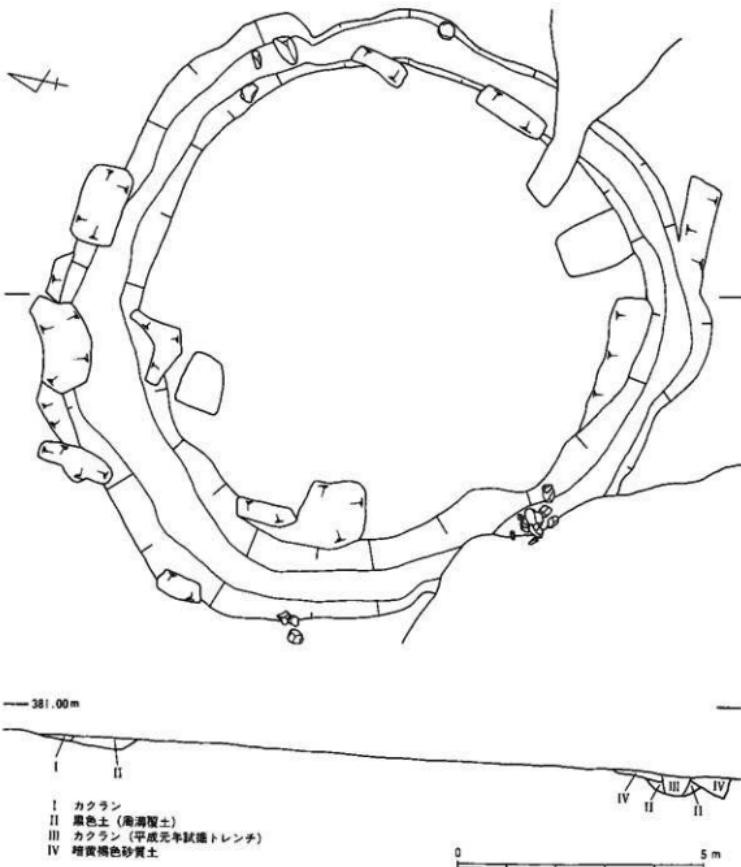
墳 丘：開墾の際に完全に削平されたものと考えられ、表土下はすぐに黄褐色の地山となり、周溝部分のみ黒色土が堆積していた。また、調査前の原地形からも墳丘と考えられるような盛り上がり等は確認されていない。墳丘規模は周溝の内側で10.2m×9.5m程の円墳になるものと考えられる。周溝内には拳大～人頭大の石が認められ、葺石が存在していた可能性がある。

周 溝：幅0.8m～2.2mを測り、全周する。覆土は基本的に黒色土の単一土層である。黒色土内より遺物が出土している。



第3図 1号墳周溝出土遺物

遺 物：周溝内から比較的まとまった量が出土しているが小破片が多く固化できたものは少ない。1は土師器高杯の脚部で、いわゆる屈折脚高杯である。内面には輪積底を顕著に残しているが、器面荒れが激しく調整は不明である。2は須恵器の腹で、復原口径10.4cm、推定器高13.5cmを測る。口縁端部内面に凹面を刻み段を成し、口頸部の屈曲部分に1条の凸帯を設ける。頸部には1条の横擗波状文を巡らしている。また、肩部より上には緑色のかかった自然釉がかかっている。体部下半には不定方向のナデが施されている。これらの特長から、陶邑TK208～TK23型併行の所産と考えられる。また、土師器高杯も脚の長さが短くなっていることなど、屈折脚高杯としては後出の要素を持っている。以上のことから1号墳の築造年代は5世紀後半と考えられる。



第4図 1号墳

2号墳 (第5～7図・図版1、6、9)

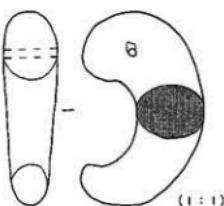
位 置：X～E-10～15区 規 模：直径約19.2m 高さ2.1m

平面形：円形

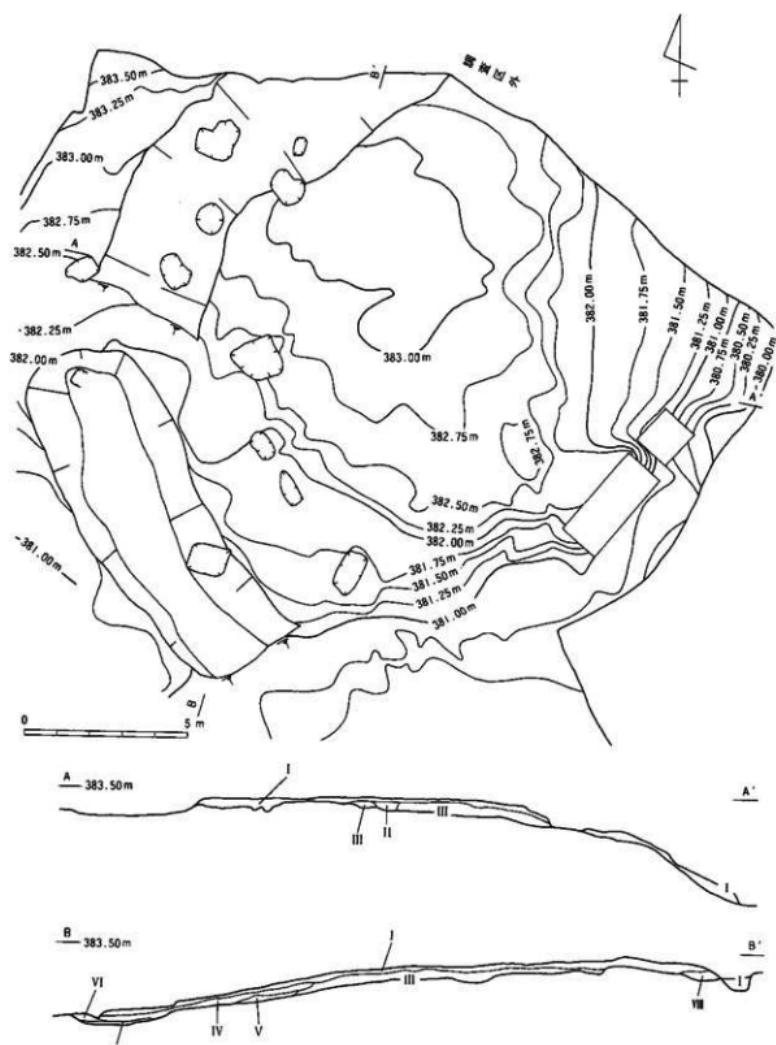
新旧関係：1号住居跡を切り、関係する全ての土坑に切られる。

墳 丘：南東部は開墾の際に著しく改変を受けており原形を止めていなかった。北西部からは肩溝を検出しているが、北側が調査区外となるため全体の沿程を検出しただけである。ここから墳丘規模を復原すると直径19.2m前後を測る円墳になるものと考えられる。覆土は部分的に盛土と考えられる暗褐色土の堆積が認められたが、その他は表土下はすぐに黄褐色の地山となっていた。主体部は検出されなかった。

開墾の際に破壊されたものと考えられる。

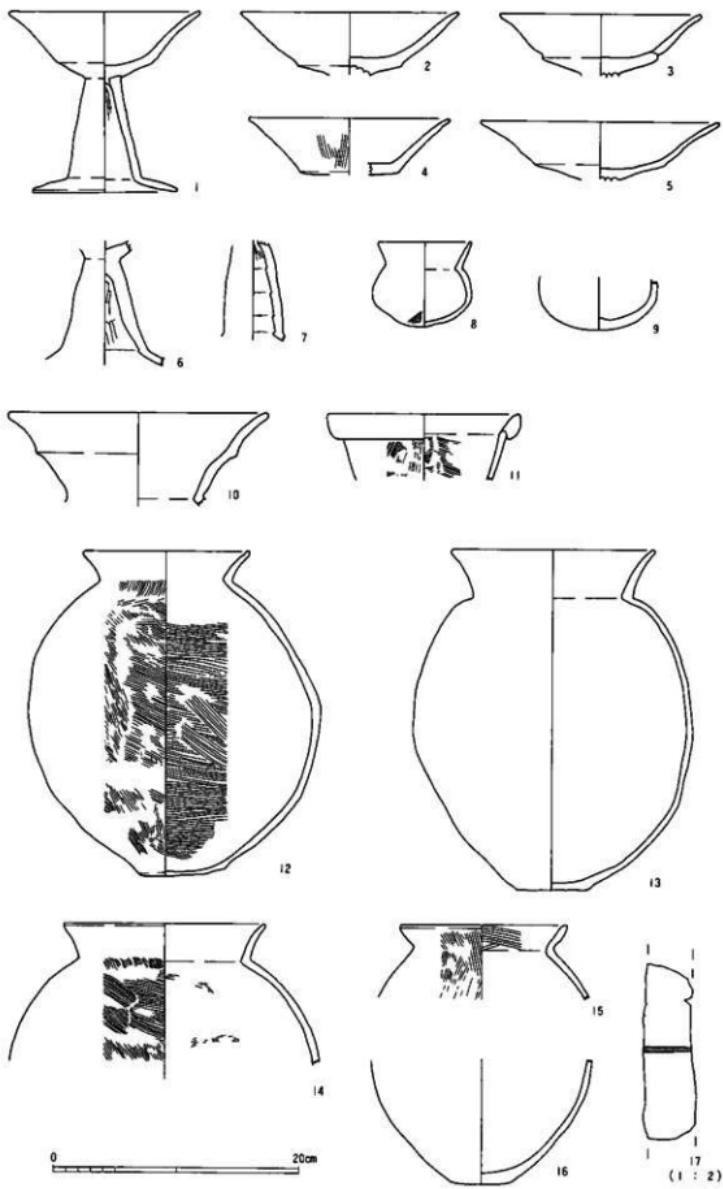


第5図 2号墳肩溝出土勾玉



- | | |
|--------------|------------------|
| I 表土 | V 黑色土 |
| II カクラン | VI 黒褐色砂質土 |
| III 喜褐色土（埴土） | VII 黒色土（植物多量に含む） |
| IV 黑褐色 | VIII 黒色土（周溝埋土） |

第6図 2号墳



第7図 2号墳周溝出土遺物

周溝：幅4m前後を測る。覆土は大別して3層に分けることができ、VII層の黒色土中から大量に遺物が出土している。

遺物：周溝内より土師器、石製勾玉、鉄製品が出土している。墳丘からもわずかに土器片が出土しているが、図化できるものはない。第5図は石製勾玉である。全体は丁寧に磨かれ、灰白色を呈している。平面形はC字形をし、断面形は楕円形をしている。長さ3.98cm、幅2.46cm、長径1.36cm、重さ13.098gを測る。両側穿孔である。第7図1～7は高杯である。杯部にはいずれも明瞭な段が認められ、筒部は直線的に伸びて脚部が大きく開く屈折脚高杯である。8、9は小型丸底土器であり、8の底部外面はハケによって成形されている。10は有段口縁壺で口頭部に明瞭な段が認められる。11は折り返し口縁壺である。12～16は平底の甕で、いずれもくの字に立ち上がる口頭部を持ち外面はナナメハケ、内面はヨコハケによって成形されている。17は鉄製品でその形状から鉄鎌であると考えられる。高杯は筒部が長く直線的に伸びており、1号墳出土の高杯よりも古相を見せている。また、小型丸底土器、有段口縁壺の出土、須恵器が全く認められないことからも1号墳よりも先行するものと考えられる。以上のことから2号墳の築造年代は5世紀前半と考えられる。

3号墳（第8～14図・図版2、3、6～9）

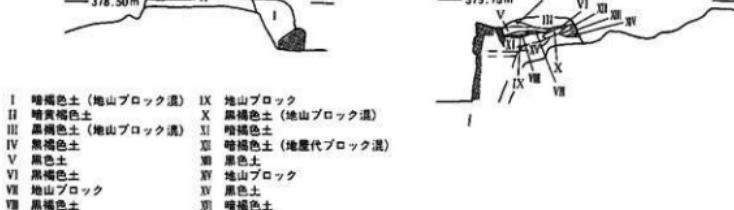
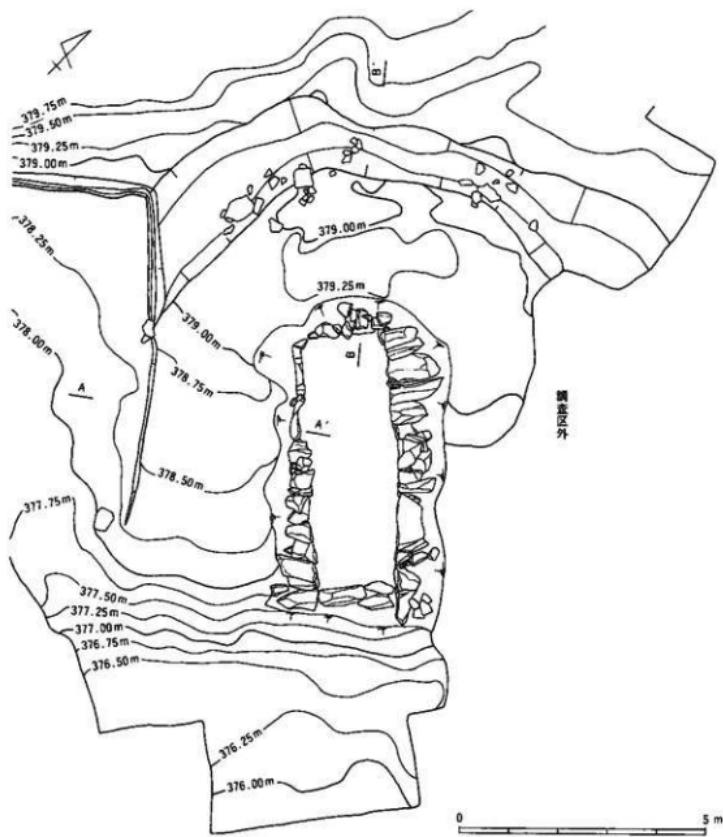
位 置：G～J～2～5区 規 模：直径約10.5m 平面形：円形

新旧関係：1号墳、2号住居跡を切る。

墳丘：1号墳の規模を確認するため重機で拡張したところ、石室の一部が露出してその存在が明らかとなつたものである。調査前の原地形は平坦であり、古墳の存在は予測できなかった。このため墳丘の一部を破壊してしまった。南東側は調査区外となり、南西側は開墾の際に削平されていた。北西側は2号住居跡を墳端と認証してしまったため、2号住居跡検出時に破壊してしまった。北東側で長さ12m程周溝を検出していて、これを基に墳丘規模を推定すると、直径約10.5mを測る円墳であると考えられる。

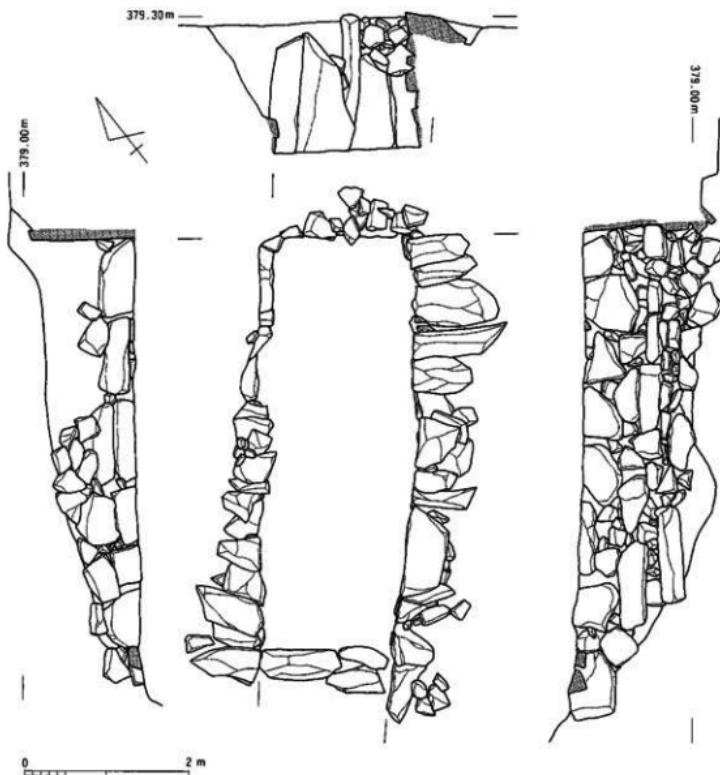
主体部：主軸をN-39°-Eに持つ無袖式の横穴式石室である。玄室長5.04m、最大幅2.03m、現存高1.74mを割り平面形はわずかに胴が張る。奥壁は4枚の板石を並べ、空いた空隙に柱上の石を差し込んでいる。更にその上に角礫を積み上げて平坦面を作り出しているようである。側壁は大型の石を置いて腰石とし、角礫を積み上げて壁面としているが、かなり大きな石も使用しておりバラエティーに富んでいる。ほぼ垂直に積み上げられているが若干持ち送りぎみである。玄室は中世に墓として再利用され、石が積み変えられていたため右側壁の残存状況は良くない。この中世墓の底面から玄室床面までは約50cmの土が堆積していて、すでにこの時点で天井石は失われていたものと考えられる。玄門部には橋石が置かれ5cm程下がって狭道部へと続いている。狭道部は長さ0.8m程しか残存していなかったが、墳丘規模から推定すると更に2m程続いていたものと考えられる。床面は砾床を一面確認できただけであり、それも奥壁から1/3程度の範囲にとどまっている。礫の存在しないところからも遺物が出土していることから、砾床は玄室全体に及んでいたものではないと考えられる。

周溝：検出した周溝の延長は12m程であり、墳丘規模から推測すると全体の劣化程度を検出したものであると考えられる。石室前面が削平されて失われているため、全周するものかどうかは明らかではない。周溝内には拳大～人頭大の石が認められ、石室から転落したものである可能性があるが1号墳と重複する部分でもあり、1号墳から転落した石である可能性も否定できない。



第8図 3号填埋丘測量図

遺物：玄室内、周溝内から出土している。玄室内の遺物出土状況は第10図に示したとおりである。第11図は耳環である。いずれも金銅張りであるが、銹化が激しく部分的に渡金が残っているだけである。第12、13図は鉄器である。1、2は直刀でいずれも右側壁際より出土している。3は鞘口金具と考えられ、1の直刀に合う大きさであるがやや離れた位置から出土している。4～24は鉄鎌である。全体を窺い知ることのできるものは1点のみであるが、少なくとも7点以上を認めることができる。いずれも長類鎌である。4～6は片刃箭鎌もしくは柳葉鎌と考えられ、7は柳葉鎌、8～10は三角形鎌である。25～36は刀子である。少なくとも6点以上が認められる。39、40は鉄釘と考えられるが、排土中からの出土であり中世墓に伴うものである可能性が高い。41、42は馬具帶である。いずれも環状鏡板付帶であり、41は左側壁の玄門より、42は奥壁右側附近より出土している。43、44はU字型柄先金具と考えられる。45は41の帯に接するように出土した鉄具である。46、47は革金具の一部と考えられる。48は鉄製環または鎖の一部と考えられる。49～53は紙と考えられる。54は石斧型の石製模造品である。図示した他にもう1点出土している。第14図1～6は滑石製の玉類である。色調は全て灰

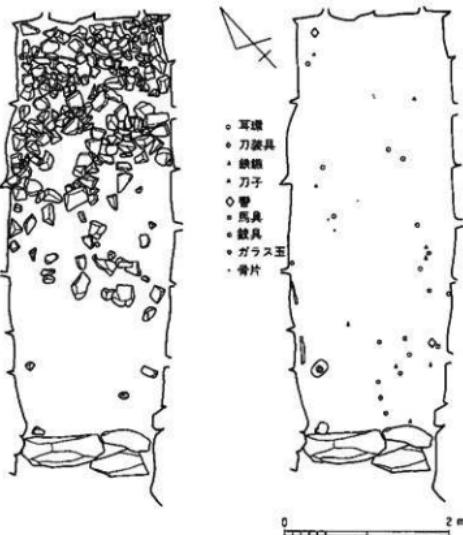


第9図 3号墳石室展開図

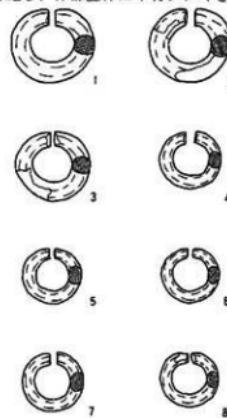
白色を呈する。7~39はガラス小玉であり、緑青色、淡青色、濃青色の3種類が認められる。各々の計測値は第1表に示したとおりである。40、41は玄室内より出土した須恵器で、1は横瓶である。胴部の両端を粘土板で閉塞し、更に中央部で接合している。胴部中程には径約1cmの円孔が穿たれていたが粘土で塞いでいる。暗灰色を呈する。2は平瓶である。口頭部は直線的に立ち上がり、体部にはボタン状の突起を張り付けている。体部下半を回転ヘラケズリ、上半をロクロナデによって成型している。灰白色を呈する。第15図は周溝内より出土した土器である。1

は土師器高杯で筒部から脚部にかけて「ハ」の字に開き、境は明瞭でない。2、3は須恵器の高杯でいずれも長脚2段スカシを有するものである。2は推定高15cmを測り、杯部外面に稜線を持つ。脚部は2方向に2段のスカシを有し、完全に切り抜いている。3も2と同様であるが、脚の基部が2よりも細くなっている。4は提瓶の口頭部と考えられる。5は大甕である。口径31.4cm、器高70.4cmを測り、口頭部に2段の横描波状文を巡らしている。肩部にカキメを施し、体部全体に平行タタキを施しているが、内面の当具痕は完全に消されている。この他に杯蓋、肩部に連続山形文を持つ台付長頸壺の破片が出土しているが、小破片のため図示し得なかった。周溝内から出土した須恵器はいずれも破片の状態で出土しており、人為的に破碎されたものと考えられる。

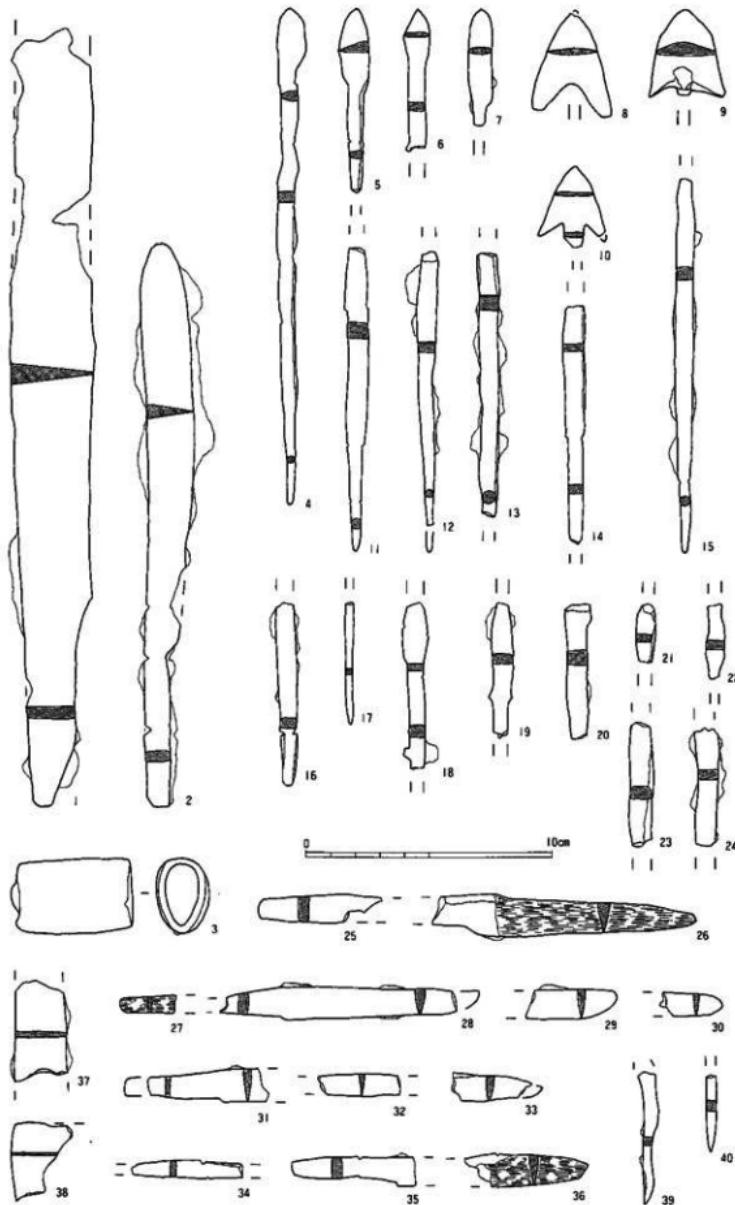
周溝内より出土した須恵器高杯は、2方向にスカシを持つ長脚2段スカシ高杯であり、陶邑T43~209型式併行と考えられる。一方、玄室内より出土した横瓶は俵形の体部に基部の太い口頭が付くものであるが、体部に円孔を穿ち粘土で塞いでいることなど、あるいは樽形甕を模して作られたかのような印象を受けるものである。鉄鎌には、片刃箭鎌、柳葉鎌、三角形鎌の3種類が認められ、刀子にも両間のものが認められるなど、7世紀代に下っても矛盾はないものである。



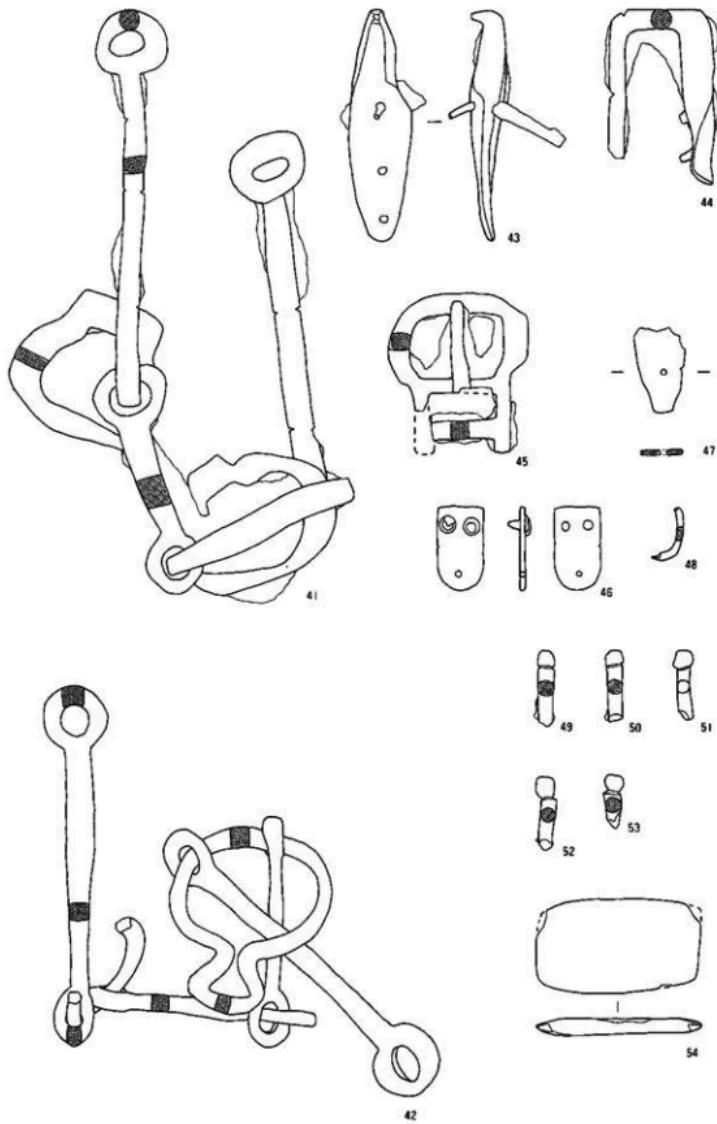
第10図 3号墳玄室床面及び遺物出土状況



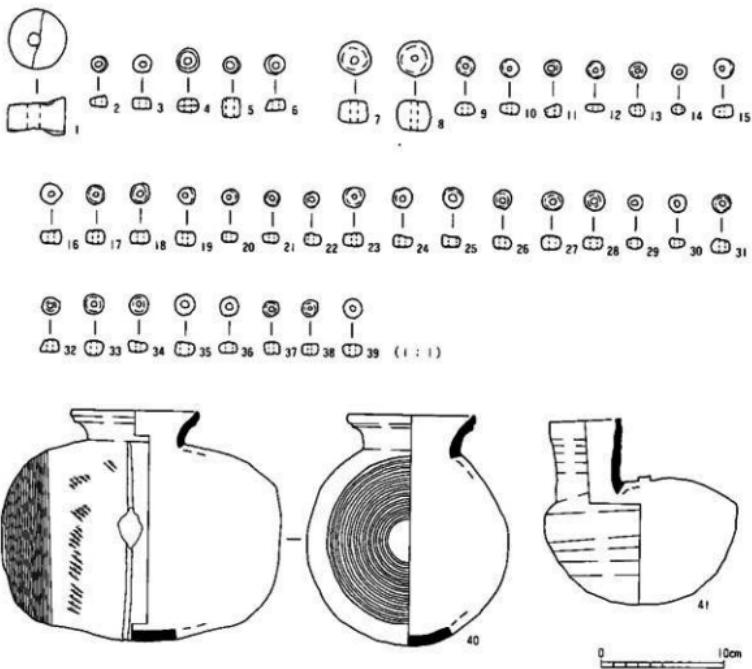
第11図 3号墳出土耳環



第12図 3号墳出土鉄製品その1



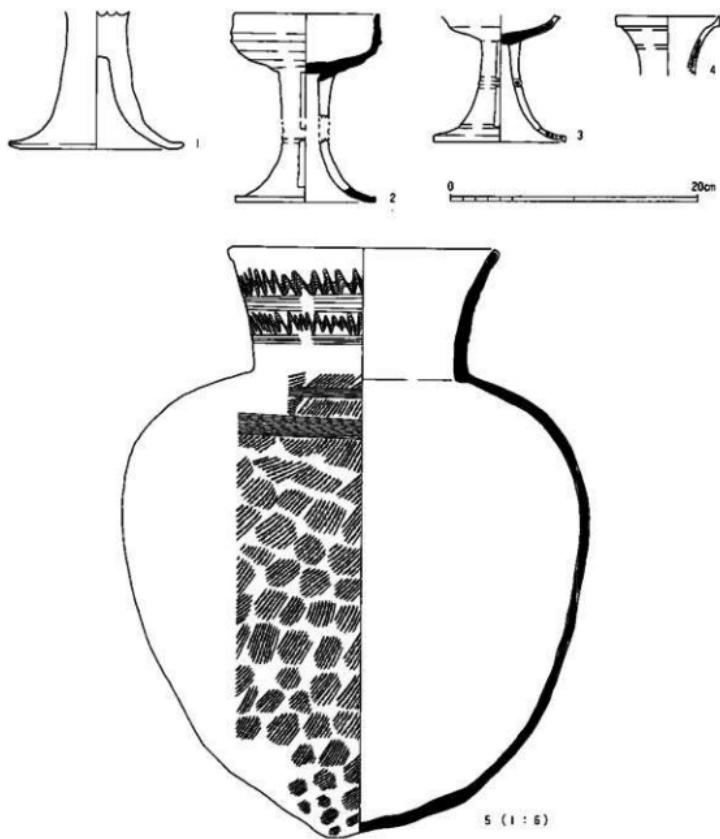
第13図 3号墳出土鉄製品その2



第14図 3号墳玄室出土玉類・土器

品目No.(直径mm)	高さ mm	幅径 mm	孔径 mm	重さ g	色 調	備考	品目No.(直径mm)	高さ mm	幅径 mm	孔径 mm	重さ g	色 調	備考
浮石質白玉							19 (10)	2.4	3.5	1.1	0.036	緑白色	
1 (8)	7.5	11.9	2.9	1.644	灰白色		20 (10)	1.9	3.6	1.4	0.031	緑白色	
2 (4)	2.1	3.3	1.3	0.033	×		21 (10)	2.0	3.6	1.3	0.032	緑白色	
3 (4)	2.2	3.9	1.3	0.032	×		22 (10)	2.2	3.3	1.3	0.030	緑白色	
4 (4)	2.4	4.3	1.6	0.074	×		23 (10)	2.6	3.6	1.0	0.055	緑白色	
5 (7)	3.7	3.1	1.6	0.049	×		24 (10)	2.1	3.9	1.6	0.032	緑白色	
6 (4)	2.3	4.1	1.8	0.047	×		25 (10)	2.4	3.8	1.3	0.036	緑白色	
(8)	-	-	-	0.015	緑片		26 (10)	2.6	3.8	0.9	0.049	緑白色	
ガラス小玉							27 (10)	2.7	3.9	1.2	0.048	緑白色	
7 (2)	4.7	6.5	1.8	0.289	緑青色		28 (10)	2.1	3.2	1.2	0.027	緑白色	
8 (19)	5.0	7.4	1.9	0.557	緑青色		29 (10)	2.0	3.5	1.1	0.035	緑白色	
9 (3)	2.4	4.0	0.9	0.047	緑青色		30 (10)	2.7	3.8	1.0	0.045	緑白色	
10 (4)	2.6	3.9	0.9	0.054	緑青色		31 (10)	2.8	3.8	0.9	0.050	緑白色	
11 (5)	2.7	3.4	1.5	0.036	緑青色		32 (10)	2.4	4.0	1.4	0.042	緑白色	
12 (6)	1.8	3.7	1.3	0.027	緑青色		33 (10)	2.3	3.9	1.2	0.042	緑白色	
13 (9)	2.5	3.7	0.9	0.045	緑青色		34 (10)	2.7	4.0	1.6	0.045	緑白色	
14 (11)	2.2	3.5	1.1	0.037	緑青色		35 (10)	2.1	3.9	1.5	0.031	緑白色	
15 (12)	2.4	4.2	1.1	0.052	緑青色		36 (10)	2.3	3.4	1.3	0.037	緑白色	
16 (14)	2.8	4.1	1.1	0.053	緑青色		37 (10)	2.3	3.3	0.8	0.034	緑白色	
17 (25)	2.5	3.8	0.9	0.049	緑青色		38 (10)	2.7	3.9	1.1	0.054	緑白色	緑片多數
18 (6)	2.7	4.1	1.2	0.063	緑青色		39 (10)	-	-	-	0.216	緑白色	
							40 (10)	-	-	-	0.042	緑白色	
							41 (10)	-	-	-	0.165	緑片多數	

第1表 3号墳出土玉類計測値



第15図 3号墳周溝出土遺物

以上のことから、3号墳は6世紀末に築造され、隣接する一本松古墳が7世紀後半の築造とされることから、遅くとも7世紀の半ばには追葬が終了したものと考えられる。

2 穹穴住居跡

1号住居跡（第16図・図版4、7）

位 置：D～F-12～14区 規 模：不明 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-29°-W

新旧関係：2号墳周溝、24号土坑に切られる。

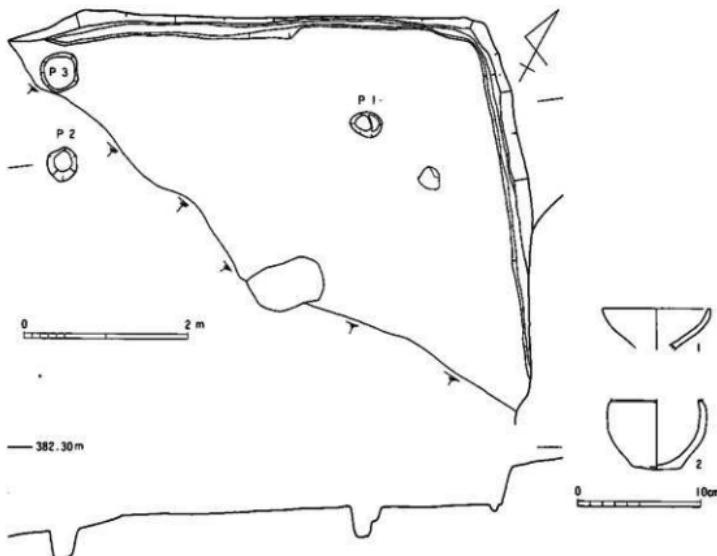
柱 穴：P1、P2は主柱穴と考えられる。P1は掘方が2段になっており、床面からの深さ40cmを測る。P2は検出面からの深さ35cmを測るが、床面が失われているため本来50cm程度の深さがあったものと考えられる。柱穴の間隔から、本住居跡の規模は少なくとも一辺6m以上あるものと考えられる。

床 面：ほぼ平坦であり、地山の黄褐色土をそのまま床としている。南半部は失われていた。

周 溝：幅約20cm、深さ約10cmで全周するものと考えられる。

造 物：出土遺物は少ない。また小破片が多く図化できたものは2点のみである。1は鉢形の土器である。口径8.2cmを測り、器高は5cm前後を測るものと考えられる。器面荒れが激しいが赤彩は認められない。2は小型の壺形の土器である。頭部に描文を施しているが、籠状文になるかは不明である。底部はやや丸みを帯びている。この他に、肩部に丁字文を施した壺の破片が出土しているが、いずれも赤彩は認められない。

1号住居跡出土の土器は、その形態から箱清水式土器の影響を強く残しているものであるが、鉢形土器、壺に赤彩が認められないなど新しい要素を持っている。したがって、本住居跡は古墳時代初頭の所産であると考えられる。



第16図 1号住居跡及び出土遺物

2号住居跡（第17図・図版4）

位 置：G～I-5、6区 規 模：不明 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-39°-W

新旧関係：3号墳に切られる。

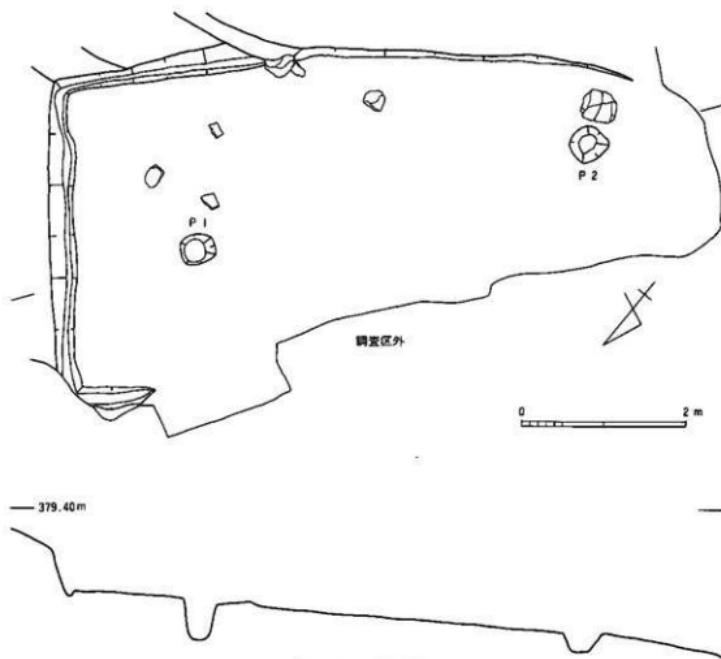
柱 穴：P1、P2は主柱穴と考えられる。P1、P2共直徑20cm前後の柱の太さが推測できる。柱穴の間隔及び東壁の長さから、本住居跡の規模は少なくとも一辺7.5m以上あるものと考えられる。

床 面：南側に向かって僅かに傾斜しているがほぼ平坦であり、地山の黄褐色土をそのまま床面としている。

周 溝：幅15cm、深さ10cm程で間仕切り溝が北側より延びている。

遺 物：当初、3号墳の端部と誤認してしまったため、3号墳周溝として取り上げてしまった遺物があるが、出土量は少ない。また、須恵器を除き接合、復原できた遺物はなかったため図化できたものはない。出土遺物には土師器の小破片が多く、器形を窺い知るものはないが、僅かに内面黒色処理された杯の破片や栗林式土器の破片が入っている。

以上のことから、本住居跡の所属時期は弥生時代中期から古墳時代中期までの間を想定できるが、内面黒色処理された杯の出土、間仕切り溝の検出などから、古墳時代中期に属する可能性が高いものと考えられる。



第17図 2号住居跡

3 土 坑

3号土坑（第18図・図版9）

位 置：D-3区 規 模：0.90m×1.5m以上 平面形：隅丸長方形

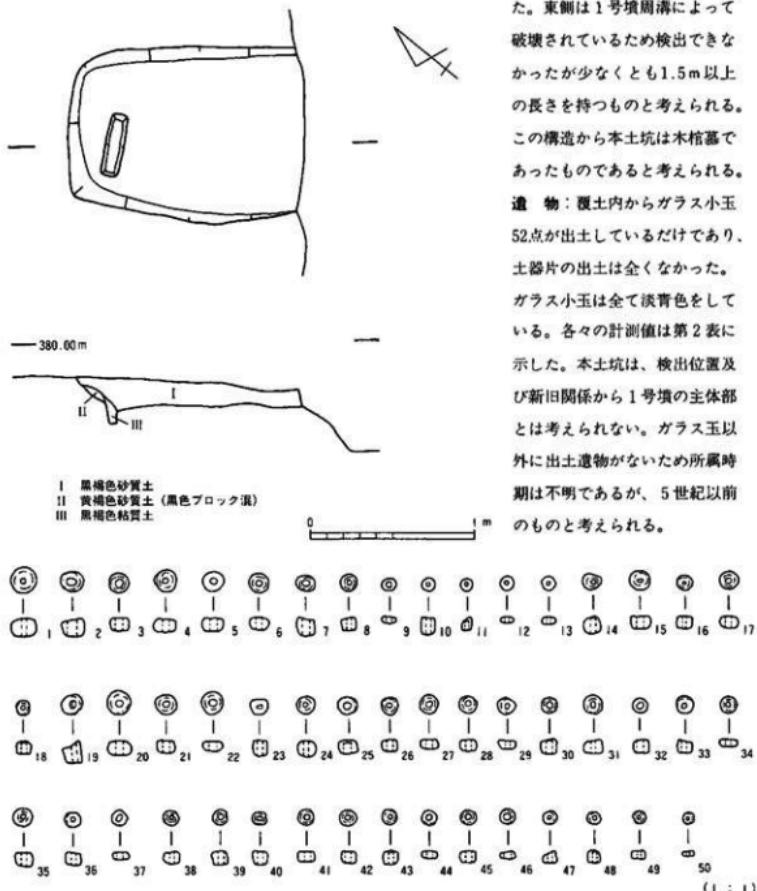
主軸方向：N-40°-W 新旧関係：1号墳周溝に切られる。

覆 土：基本的に黒褐色の單一土層である。

構 造：検出面からの深度最大20cmを測るが、上部は開墾の際に削平されたものと考えられる。西側

の壁際に小口板の痕跡と考えられる長方形の落ち込みを検出した。東側は1号墳周溝によって破壊されているため検出できなかつたが少なくとも1.5m以上の長さを持つものと考えられる。この構造から本土坑は木棺墓であったものであると考えられる。

遺 物：覆土内からガラス小玉52点が出土しているだけであり、土器片の出土は全くなかった。ガラス小玉は全て淡青色をしている。各々の計測値は第2表に示した。本土坑は、検出位置及び新旧関係から1号墳の主体部とは考えられない。ガラス玉以外に出土遺物がないため所属時期は不明であるが、5世紀以前のものと考えられる。



第18図 3号土坑及び出土遺物

器物名(型番)	高さ mm	幅径 mm	高径 mm	底径 mm	色調	備考	器物名(型番)	高さ mm	幅径 mm	高径 mm	底径 mm	色調	備考
ガラス小玉													
1 (61)	3.2	5.6	1.3	0.131	淡青色		25 (80)	2.3	3.7	1.4	0.041	淡青色	
2 (62)	3.5	4.6	2.1	0.075	×		27 (87)	2.0	4.0	1.4	0.038	×	
3 (63)	3.4	4.0	1.6	0.068	×		28 (88)	2.2	2.2	3.0	0.039	×	
4 (64)	2.7	4.3	1.1	0.066	×		29 (89)	2.0	3.0	1.6	0.040	×	
5 (65)	2.6	4.1	1.4	0.055	×		30 (90)	2.9	5.1	1.1	0.041	×	
6 (66)	2.7	4.1	1.4	0.052	×		31 (91)	2.9	4.0	1.4	0.049	×	
7 (67)	2.9	3.6	1.6	0.046	×		32 (92)	3.0	3.1	1.0	0.040	×	
8 (68)	2.7	3.5	1.1	0.087	×		33 (93)	2.7	3.4	1.3	0.039	×	
9 (69)	1.6	3.3	1.2	0.057	×		34 (94)	1.8	3.7	1.5	0.029	×	
10 (70)	3.1	2.7	0.9	0.027	×		35 (95)	3.0	3.8	1.0	0.052	×	
11 (71)	2.0	2.7	0.8	0.015	×		36 (96)	2.4	3.0	1.1	0.028	×	
12 (72)	1.3	2.8	0.9	0.012	×		37 (97)	1.7	3.2	1.4	0.018	×	
13 (73)	1.6	2.8	0.6	0.015	×		38 (98)	2.6	3.4	0.9	0.038	×	
14 (74)	3.2	3.5	1.2	0.057	×		39 (99)	2.5	3.0	1.2	0.029	×	
15 (75)	2.7	4.2	1.0	0.063	×		40 (100)	2.2	3.2	1.2	0.026	×	
16 (76)	2.3	3.4	0.7	0.034	×		41 (101)	2.5	3.1	1.3	0.027	×	
17 (77)	2.3	3.9	1.4	0.039	×		42 (102)	2.8	3.0	0.9	0.034	×	
18 (78)	2.3	3.0	1.1	0.028	×		43 (103)	1.6	3.3	1.2	0.020	×	
19 (81)	4.4	3.9	1.6	0.082	×		44 (104)	2.2	3.1	1.1	0.025	×	
20 (82)	2.9	4.4	1.3	0.072	×		45 (105)	1.8	3.2	1.4	0.019	×	
21 (83)	2.9	4.2	1.5	0.077	×		46 (106)	2.7	2.9	0.9	0.023	×	
22 (84)	2.0	4.1	1.5	0.072	×		47 (107)	2.1	2.8	0.8	0.020	×	
23 (85)	3.0	3.3	1.2	0.059	×		48 (108)	1.9	2.7	0.9	0.013	×	
24 (86)	3.2	3.8	0.9	0.057	×		49 (109)	1.3	2.5	0.6	0.010	×	
25 (87)	2.9	4.0	1.5	0.055	×		50 (110)	-	-	-	0.046	×	実測品
							51 (111)	3.0	3.4	-	0.041	×	実測品

第2表 3号土坑出土玉類計測値

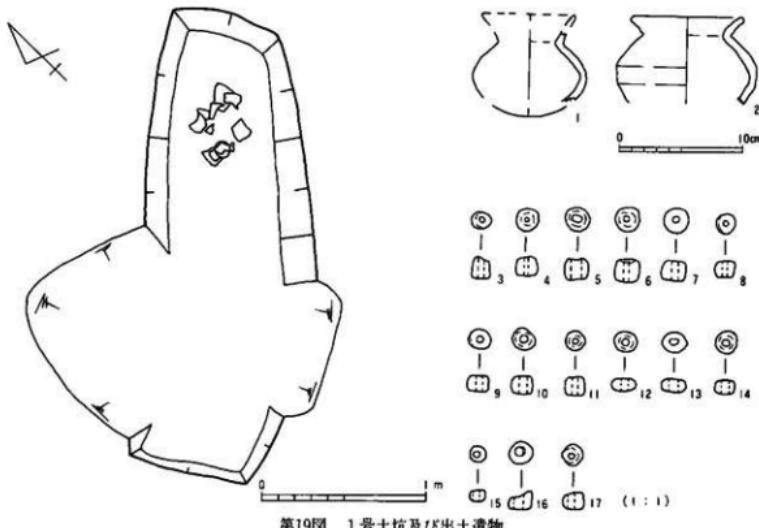
1号土坑(第19図・図版4、7、9)

位 置:D、E-7、8区 横 構: 0.80m × 2.80m 平面形: 隅丸長方形

主軸方向:N-46°-E 新旧関係: なし

構 造: 中央部を搅乱されているが、ほぼその形状がわかる土坑である。検出面からの深さ最大30cmを測り、壁はやや斜めに掘り込まれている。

遺 物: 北壁に近い部分の底面よりまとまって出土している。1は小型丸底土器である。口縁部、底部を欠くが、胴部最大径を中央付近に持つ。外面はヘラミガキされている。2は壺形の土器であり、胴上半はヘラミガキ、下半をヘラケズリによって仕上げている。この他に壺の破片なども出土しているが固化し得なかった。覆土中より淡青色のガラス小玉18点が出土している。



第19図 1号土坑及び出土遺物

回数(登録No.)	高さ mm	直径 mm	孔径 mm	底径 mm	重さ g	色調	備考
ガラス小玉							
3 (4)	4.3	3.5	1.3	0.058	淡青色		
4 (4)	4.0	4.3	1.4	0.094			
5 (4)	4.3	4.8	2.4	0.115			
6 (4)	4.3	4.9	1.2	0.126			
7 (4)	3.9	4.9	1.4	0.108			
8 (5)	3.5	4.2	1.0	0.091			
9 (5)	3.0	4.4	1.3	0.079	暗片		
10 (5)	3.3	4.4	1.3	0.083	淡青色		
11 (5)	3.8	4.0	1.2	0.073			
12 (5)	2.4	4.4	1.5	0.053			
13 (5)	2.5	4.8	1.9	0.061			
14 (5)	2.8	4.2	1.2	0.062			
15 (5)	2.3	3.7	1.2	0.039			
16 (5)	3.6	4.4	1.6	0.076			
17 (5)	3.7	4.3	2.0	0.079			
		-	4.3	1.3	0.037		欠陥品

第3表 1号土坑出土玉類計測値

5号土坑(第20図・図版4、7)

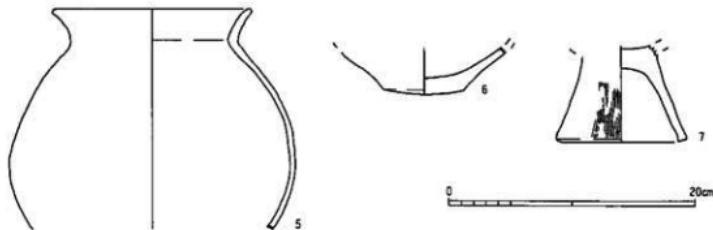
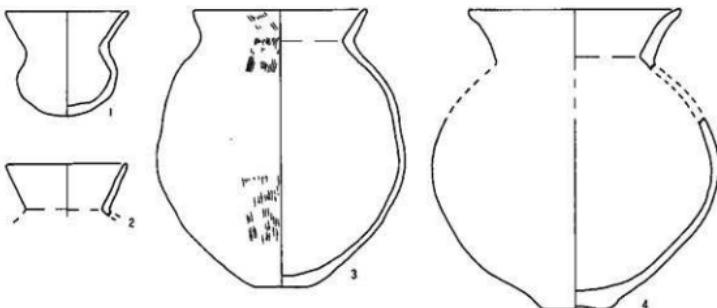
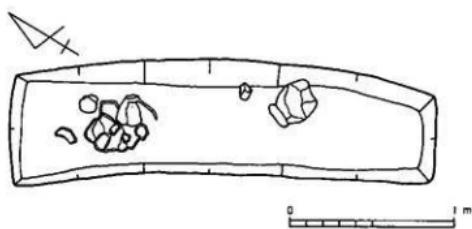
位 置: E-11区 規 模: 0.70m × 2.60m 平面形: 長方形

主軸方向: N-31°-W 新旧関係: なし

構 造: 規模、平面形共1号土坑に近似する。検出面からの深さ最大25cmを測る。

遺 物: 比較的まとまった量の遺物が出土している。1、2は小型丸底土器である。1は口縁部最大径が胴部最大径よりも大きくなっている。外面は粗いヘラミガキを行っている。3~6は甕である。

いずれも「く」の字に外反する
口頭部を持ち、胴部は球形に近
い形を持つ。口縁部径は胴部最
大径よりも小さい。器面荒れが
激しいが内外面共ハケによって
調整されている。底部は平底を
基本としている。7は台付甕の
脚部である。



第20図 5号土坑及び出土遺物

18号土坑（第21図・図版4、9）

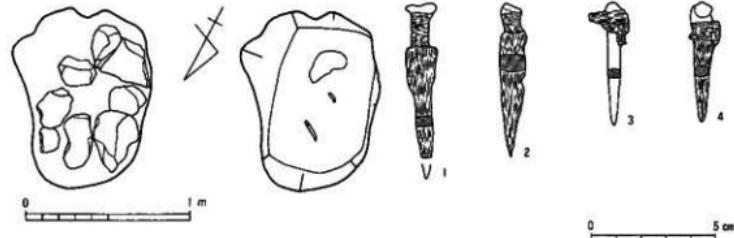
位 置：B-13区 規 模：0.60m × 1.15m 平面形：方形

主軸方向：N-14°-W 新旧関係：2号墳周溝を切る。

構 造：上層には人頭大の礫が詰め込まれ、これを取り除くと人骨が検出された。検出面からの深さ最大40cmを測る。土坑下端は60cm×90cm程の方形をしており、鉄釘が出土していることから木棺墓であったものと考えられる。人骨の遺存状況は悪い。頭蓋骨の一部と、四肢骨の一部がかろうじて残存していたのみである。

遺 物：鉄釘が出土している。長さ7cm程のものと5cm程のものの2種類あり、いずれも木質が残っている。木質の繊維方向は上部1cm程が横方向、下部は縱方向であり側板を打ちつけていた釘であったものと考えられる。

本調査で検出した土坑は総数26基に上り、このうち2、6、10~26号土坑は中世墓であると考えられる。また3号墳石室内から検出した2体の中世人骨を加えると、中世墓の総数は21基となる。2、10、15、24号土坑及び3号墳石室内からは銭貨が出土しているが、いずれも銹化が激しく種類を判別することはできなかった。



第21図 18号土坑及び出土遺物

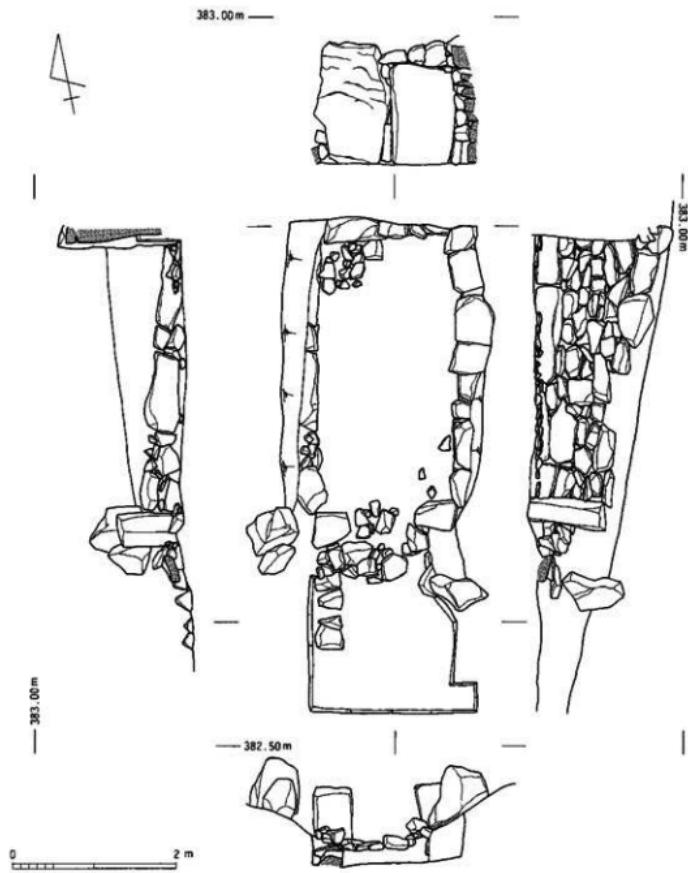
土坑番号	旧 番 号	時代	主な出土遺物	備 考	土坑番号	旧 番 号	時代	主な出土遺物	備 考
1号土坑	YNS土坑1	古墳	土師器 純玉		14号土坑	YNS2土坑5	中世	人骨	
2号土坑	YNS土坑2	中世	純貨		15号土坑	YNS2土坑6	中世	純貨、人骨	
3号土坑	YNS土坑3	古墳	約6玉	木棺墓	16号土坑	YNS2土坑7	中世	人骨	
4号土坑	YNS土坑4	不明			17号土坑	YNS2土坑8	中世	人骨	
5号土坑	YNS土坑5	古墳	土師器		18号土坑	YNS2土坑9	中世	鉄釘、人骨	木棺墓
6号土坑	YNS土坑6	中世			19号土坑	YNS2土坑10	中世	人骨	
7号土坑	YNS土坑7	古墳	土師器		20号土坑	YNS2土坑11	中世	人骨	
8号土坑	YNS土坑8	不明			21号土坑	YNS2土坑12	中世	人骨	
9号土坑	YNS土坑9	古墳	土師器		22号土坑	YNS2土坑13	中世	人骨	
10号土坑	YNS2土坑1	中世	純貨、人骨	火葬墓	23号土坑	YNS2土坑14	中世	人骨	
11号土坑	YNS2土坑2	中世	人骨		24号土坑	YNS2土坑15	中世	純貨、人骨	
12号土坑	YNS2土坑3	中世	人骨		25号土坑	YNS2土坑16	中世	人骨	
13号土坑	YNS2土坑4	中世	人骨		26号土坑	YNS2土坑17	中世	人骨	

第4表 土坑一覧

第2節 一本松古墳

1 古墳の概要

「桑原村史」によると一本松古墳は大正時代の初期に発見され、金環、土製勾玉などと共に八稜鏡2面が出土したとされている。その後昭和59年に更埴市史刊行に伴い石室の実測調査が行われ、主軸N-11°-W、玄室長3.2m、同幅1.8m、高さ1.8m、羨道長1.3mの両袖型の横穴式石室であると報告されている。墳丘については直径約11m、高さ約2.5mの円墳とされているが、現況の地形は北から南に向かって緩く傾斜する平坦地である。築造年代については、玄門部に立柱石を立てる石室の形式から7世紀後半代と考えられているが、出土遺物等不明な点が多く確証に欠ける。

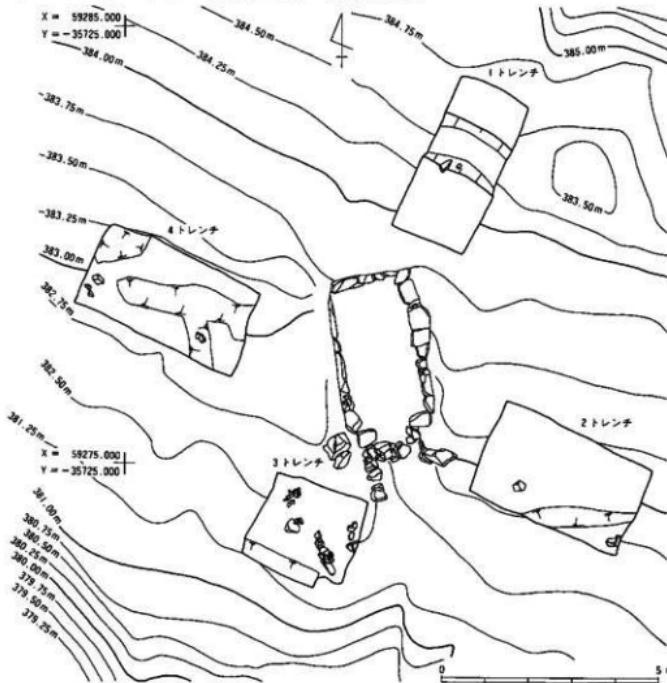


第22図 一本松古墳石室展開図

2 今回の調査

今回の発掘調査では、墳丘の範囲を確認するために古墳の周囲に4つのトレーナーを設定して発掘調査を実施した。石室北東側に設定した1トレーナーからは、周溝状に地山を掘り込んだ落ち込みを検出した。2、4トレーナーからはこの周溝状の落ち込みは検出されておらず、斜面の上側のみにあったものと考えられる。石室南西側に設定した3トレーナーからは拳大～人頭大の礫を多数検出し、石室からの転落、あるいは外護列石的なものと考えられるが上層が搅乱されていたため、また調査範囲が限られていたため、どのような性格を持ったものははっきりとしない。2、4トレーナーは搅乱、削平が激しく墳端を確認することはできなかった。

この結果、古墳の東西方向については墳丘の範囲を確認することはできなかったが、南北方向についてはおよその資料を得ることができたものと考えられる。1トレーナーから検出した周溝状の落ち込みは緩く弧を描いているため、墳形については円墳であると言えることができるだろう。また、3トレーナーから検出した礫を外護列石と捉えることができるならば、墳端はこの礫群付近に求めることができる。1、3トレーナーの調査結果から墳丘規模を推定すると、直径約10.5m前後の円墳であるものと考えられる。墳高については、3トレーナー礫群と石室の最高地点の比高差が約2.7mあることから、見かけ上の高さは本来3m以上あったものと考えられる。



第23図 一本松古墳測量図

第4章 まとめ

2年度に渡る発掘調査により多大な成果を上げることができた。特に新発見の古墳3基を含む4基の古墳の調査を行うことができ、千曲川左岸における古墳時代の研究を行う上で大きな収穫があったものと考えられる。

湯ノ崎遺跡の立地する尾根は龍との比高差約30mを測り、周知の古墳としては一本松古墳の存在が知られているだけであった。「更埴市史」においても、この尾根上には一本松古墳以外にも何基かの古墳が存在する可能性が指摘されていたが、今回の調査によってそれが裏付けられることとなった。

「更埴市史」では越将軍塚古墳を中心として、その支尾根上に散在する古墳を「塚穴古墳群」として扱っている。しかしながら、一本松古墳を含め今回検出した古墳群は、塚穴古墳や長野市境の尾根上に散在しているとされる湯ノ崎古墳群とは系譜を異にしているものと考えられる。そこで今回検出した古墳群に一本松古墳を加えた4基をもって「一本松古墳群」と呼称することとした。

各古墳の詳細についてはすでに述べたとおりであるが、そのありかを見ると古墳時代後期の群集墳ではなく、あたかも一世代に一基の古墳を築造しているように見受けられる。

1号墳は、墳丘が完全に削平され周溝のみの検出であったが、直径約10mの円墳であると考えられ周溝内より須恵器が出土している。圓化できた須恵器は龜のみであったが、この他に杯蓋と考えられる小破片が出土している。これらの須恵器は陶邑TK23型式併行と考えられ、1号墳は5世紀後半代に築造されたものと考えられる。

2号墳は出土遺物から5世紀前半代の築造と考えられ、墳丘規模も直径約20mと今回検出した古墳の中では最も大きく、本古墳群中の盟主墳的なものであったものと考えられる。埴輪の出土は確認されなかったが、周溝内より多量の土器片が出土している。出土遺物には高杯、壺、小型丸底土器、甕が認められる。また2号墳の周囲には1、5号土坑のように、ほぼ同時期と考えられる土坑が検出されていて2号墳との関連性を窺うことができる。これらの土坑は2号墳の墓前祭祀に伴う廐棄土坑であった可能性がある。

3号墳は直径約10.5mの規模を持つ円墳であると考えられ、内部主体に無袖の横穴式石室を持っている。羨道部分が大きく削平されているため石室規模については推測の域を出ないが、全長8m前後で、玄室長5.04m、同最大幅2.03m、現存高1.74m、羨道部現存長0.8mを測ることができる。天井石はすでに失われていた。玄室内より検出した中世墓は、右側壁を横み変えて1m×2m程の石棺的空間を作り出し、そこに2体の遺体を埋葬したものであった。遺体の上層には拳大の礫が大量に入れられ、天井石と考えられるような石材は認められなかった。また、玄室床面は中世墓よりも50cm程下にあり、中世段階においてはすでに天井石は失われており、その時点で相当量の土が玄室内に堆積していたものと考えられる。床面については礫床を1面検出したのみであるが、出土遺物には時期差のあるものも認められるため、何回かの追葬を想定するべきであろう。副葬品の出土状況は玄室内に散乱したような状態であったが、奥壁右側に1か所、中程の所に3か所、前面に1か所集中して出土しているように見受けられる。前面の遺物集中は、追葬時に以前の副葬品を片付けた結果生じたものである可能性がある。他の遺物集中が遺体埋葬時の状態を反映しているものとすると、この玄室内には少なくとも5体以上の埋葬が行われたものと考えられる。3号墳の築造時期は、周溝内から出土

した須恵器が陶邑TK43型式併行と考えられるため6世紀末と考えられる。また追葬は、隣接する一本松古墳の築造時期を7世紀後半とするならば、遅くとも7世紀半ばには終了していたものと考えられる。全長8m前後という石室規模は、更埴市西部地域では八幡地区にある判官塚古墳の石室規模に匹敵するものであり、市内でも有数の規模を持ったものであると言うことができる。

一本松古墳については、今回の調査ではその築造時期を推定できるような遺物の出土はなかったが玄門に立柱石を立てる型式の横穴式石室の成立は7世紀代に入ってからと考えられており、また奥壁に大きな板石を立てる構造は新しい要素とされているため、本古墳の築造時期は從来考えられてきた7世紀後半代としてもそれほどの誤差はないものと考えられる。

一本松古墳群は2号墳・・・1号墳・・・（　）・・・3号墳・・・一本松古墳という変遷をたどることができるだろう。1号墳と3号墳には1世紀程の時期差があるため、この間に2基程度、横穴式石室を内部主体に採用した古墳であれば1基、の古墳が築造された可能性が指摘できる。調査地周辺は開墾による地形の変化が著しく、原地形からその存在を推定することはできないが、発掘調査は尾根の全てを行った訳ではないので今後の調査に期待したい。

住居跡の検出も注目される。本調査によって検出した住居跡は2棟であったが、このうち1号住居跡は古墳時代初頭のものと考えられる。この時期の住居跡は八幡地区の外西川原遺跡や、星代遺跡群などで検出されているが、いずれも緩傾斜地や沖積地での検出であり、尾根上からの検出は極めて特殊である。1棟のみの検出であり、これが何を意味しているのかは即断できないが、遺構外からではあるが箱溝式と考えられる土器片も少量ながら出土しているため、この尾根上に弥生時代後期から集落が存在していた可能性がある。

2号住居跡は、明確な時期決定はできないものの古墳時代中期の可能性が高いと考えられる住居跡である。1号墳もしくは2号墳の築造時期と重なってくるものであり、殯屋など古墳と関連する遺構である可能性が考えられる。出土遺物等からどちらの古墳に関連するものか明らかでないが、検出位置からして1号墳に関連するものではないかと考えられる。

もう一点注目されるものに、中世墓の検出が上げられる。2号墳の周囲を中心にして検出した総数は21基となる。また尾根上に設定したトレンチからも検出していることから、尾根全体に散在している可能性がある。全て土坑として取り扱っているが、10号土坑は炭化物と焼土を多量に含んでいて火葬墓であったものと考えられる。また18号土坑や3号墳玄室内からは鉄釘が出土していることから、木棺墓も含まれていたものと考えられる。更に2号墳の周囲に特に集中して構築されていることから当時、墳丘が何らかの信仰の対象になっていた可能性があり、現在も石祠が建立されている。

更埴市西部地区では初の本格的な古墳の調査となり、その成果にも目を見張るものがあった。一本松古墳群周辺の集落遺跡についてはこれまであまり調査例がなく、古墳群と集落の関係を明らかにすることは今後の課題として残っている。平成8年度に発掘調査が行われた桑原遺跡群湯屋遺跡は、本古墳群から1Km程離れていて直接の関係は薄いと考えられるが、弥生時代後期から平安時代にかけて80棟に上る住居跡が検出されている。本古墳群周辺にもこのような集落が存在したものと考えられるが、今後の調査に期待したい。

一本松古墳及び3号墳については稻荷山公園の建設計画の中で整備が行われ、公開される予定である。開発事業に伴い、破壊を余儀なくされる遺跡が多数ある中でせめてもの救いである。最後に今回の調査に当たり、関係の皆さんの御協力に対し深く感謝申し上げまとめとします。



調査区全景



1号墳全景



2号墳全景



3号填全景



3号填全景（西侧上り）



3号填石室搬出状況



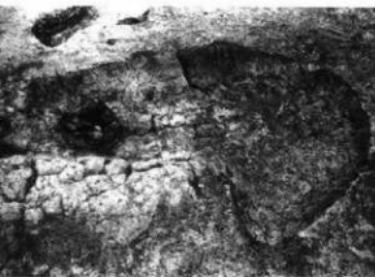
3号墳石室外



3号墳石室



3号墳石室内
遺物出土状況



上 1号土坑
下 5号土坑
右 18号土坑



一本松古墳全景



調査区全景
(東側より)



トレンチ

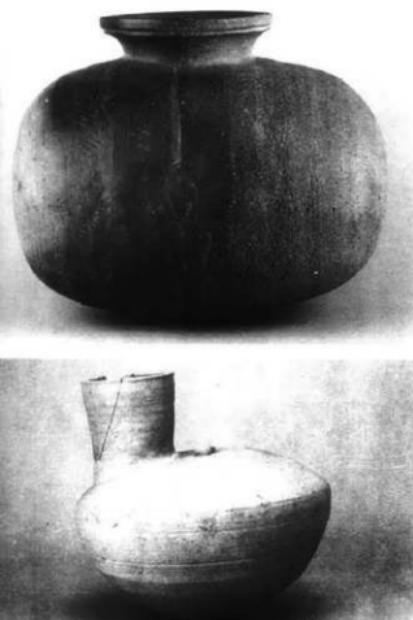
圖版 6

1号填出土遗物

2号填出土遗物



3号填出土遗物





1号住居跡出土遺物

1号土坑出土遺物

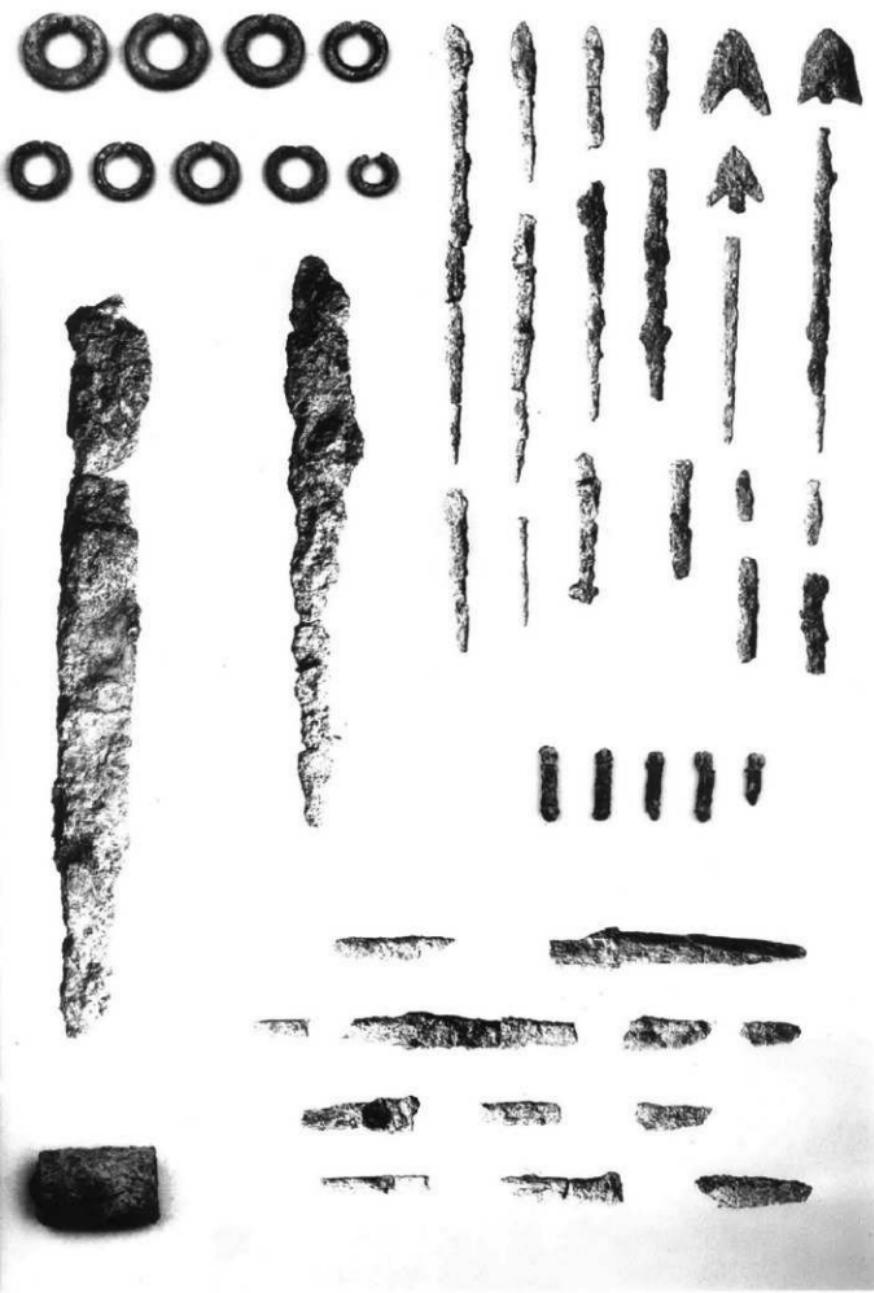


5号土坑出土遺物



図版 8

3号墳出土金銅器





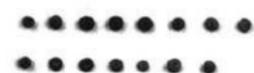
18号土坑出土鉄釘



3号墳出土石製品



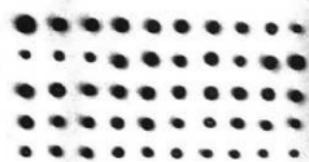
1号墳出土玉類



2号墳出土勾玉

3号墳出土玉類

3号土坑出土玉類



報告書抄録

ふりがな	ゆのさきいせき・いっぽんまつこふん							
書名	湯ノ崎遺跡・一本松古墳							
副書名	-福荷山公園建設に伴う発掘調査報告書-							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野紀男							
編集機関	更埴市教育委員会 文化課 文化財係							
所在地	〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地 TEL026-273-1111							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かほん 湯ノ崎	かほん こはくし 長野県 更埴市	20216	78	36 32 0	138 6 4	19961111～ 19961226 19970702～ 19971009	1,100	福荷山公 園建設に 伴う発掘 調査
いほん 一本松	いほん いほん 大字福荷山字大牧 2095-1他	20216	77	36 32 1	138 6 4			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湯ノ崎	古墳群	古墳時代	古墳	3基	土師器 須恵器 金属器（耳環、武器、馬具、工具）、石製品 ガラス玉	新発見の古墳3基を検出。横穴式石室から豊富な副葬品が出土。		
			竪穴住居跡 土坑 溝跡	2棟 6基 1基				
一本松	古墳	古墳時代	中世	20基	人骨、銭貨、鉄釘			
			古墳	1基	土師器			

発行日 平成10年3月31日

発行 更埴市教育委員会

〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地

電話 (026) 273-1111

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒387-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105

